

【巻頭言】 附属学校教育局次長 梶山正明「子どもたちの「好き」を応援し続けた20年ー「科学の芽」賞20周年ー」

- 2 「支援教育コーディネーター研修」が開催されました ——— 篠塚明彦
- 3 第2回インドネシア日本ユースSDGsフォーラムを開催 ——— 建元喜寿
- 3 創立150周年記念事業 ——— 眞田進夫
- 4 音楽科「演奏研究」授業での2台ピアノの取り組み ——— 永山香織
- 4 高校2年生「関西地域研究」報告 ——— 松尾真太郎
- 5 しょくぶつ と いっしょに！ ——— 森澤亮介
- 5 宇宙の果てに何を得たか ——— 石崎笈之介
- 5 施設併設学級スポーツデー ——— 福西八光
- 6 東北の魅力と可能性を探る旅：修学旅行 in 仙台 ——— 田川愛里
- 6 保護者とつくる自閉症児と大学生とのサマーキャンプ ——— 工藤久美
- 7 令和7年度 理療科教員養成施設 春季スポーツデー ——— 工藤 滋
- 7 プールと海がつなぐ先輩と仲間との絆 ——— 齋藤直人
- 8 第11回 共生シンポジウム ～共生社会を目指すつくばふぞくの集い～



筑波大学
University of Tsukuba



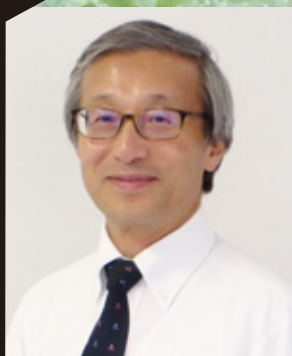
校門



中庭

子どもたちの「好き」を応援し続けた20年 —「科学の芽」賞 20周年—

附属学校教育局次長 梶山正明



KAJIYAMA
MASAAKI

筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞は、本学ゆかりのノーベル物理学賞受賞者である朝永振一郎博士の生誕100年を記念して、2006年に創設された全国規模の科学コンクールです。今年で記念すべき20周年を迎えます。

「科学の芽」賞は、大学主催の科学コンクールとしては、対象年齢層や募集分野の広さの点において他に類を見ないものです。その運営を可能としたのは、小学校1校、中学校2校、高等学校3校と特別支援学校5校を擁する筑波大学の強みであり、そこで働く理科教員の力量です。彼らは、全国の子どもたちの「科学の芽」を育むため、毎年の厳格な審査や受賞者への助言、受賞作品の書籍制作に尽力してきました。

20年の歴史とともに、受賞をきっかけに科学・技術に関わる分野に進み、活躍されているOB・OGも増えています。この方たちの力を借りて後輩たちの研究を支援する「応援団」づくりを構想し、令和7年12月21日(日)開催の第20回表彰式・発表会にOB・OGを招く準備などを進めています。この企画の実現に向けて11月末までクラウドファンディングも実施しております。ぜひ、皆様のご支援をよろしくお願い致します。



第1回「科学の芽」賞ポスター



「支援教育コーディネーター研修」が開催されました

附属学校教育局教育長補佐 篠塚明彦

各校の夏休みも終わりに近づいた令和7年8月25日(月)、附属学校教育局支援教育推進委員会主催「令和7年度支援教育コーディネーター基礎研修」が文京校舎432教室を会場に行われました。この研修は、各校の支援教育コーディネーターの先生方がその役割と必要な援助技術を身につけることを目的に、教育局の飯田順子先生とスクールカウンセラースーパーバイザーの山崎沙織先生を中心に企画していただき実施したものです。午前中は飯田先生、山崎先生から「附属学校とその幼児児童生徒が抱える課題と支援」、岡安朋子先生(早稲田大学)から「校内支援体制の構築と関係機関との連携」というテーマでご講義いただきました。午後からは、相楽直子先生(創価大学)ご指導の下、「附属学校における支援教育コーディネーターの役割とチーム支援の実際」をテーマに3~4名のグループにわかれて実際の場面を想定した演習が行われました。当日は、支援教育コーディネーターの先生方のほか、管理職やスクールカウンセ

ラーの先生方にもご参加いただき学びを深めることができました。参加者からは、「コーディネーターの役割と専門性を詳しく理解できた」「校内体制作りの重要性を理解できた」「講義に加え午後の演習での学びが大きい研修だった」といった声が寄せられました。このような形での実践的な支援教育コーディネーター研修は初めての試みでしたが、昨今附属学校が直面する課題状況の中で意義と必要性を強く感じるものでした。なお、12月には今回の研修と各校での取り組みを踏まえたフォローアップ研修も予定されています。



午後に行われたグループに分かれての演習の様子

第2回インドネシア日本ユースSDGsフォーラムを開催

附属坂戸高等学校 主幹教諭 建元喜寿



ポスターセッション

令和7年度も、7月27日～8月8日にかけて、筑波大学ソーシャルインパクト創出支援事業に認定されている「国際農業研修Ⅶ」を履修する大学生10名とともに、インドネシアで研修を実施しました。

そのハイライトとして、8月6日(水)に「第2回インドネシア日本ユースSDGsフォーラム」に参加しました。インドネシアからは、インドネシア教育大学附属高校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校をはじめ、10校が参加しました。

会場となったインドネシア教育大学は1954年に設立され、西ジャワ州バンドン市に本部を置く、教育学を中心に科学・芸術・観光など幅広い分野を有する総合大学です。筑波大学とは、SEA-Teacher (国際教育実習) などを通じて多くの連携があります。

フォーラムの冒頭では、Prof. Dr. H. Didi Sukyadi, M.A.学長より祝辞をいただき、大変感動しました。続いて、SDGsに関する特別講義、高校生・大学生によるポスター

セッション、そして国を越えた混成グループによる議論が行われました。最後には各チームの発表と、参加者全員によるベストコラボレーション賞の選出があり、盛況のうちに終了しました。

準備段階から多大なご協力をいただいたインドネシア教育大学附属高等学校の皆様に、心より感謝申し上げます。

全体写真



記念横断幕(高等部専攻科造形芸術科生徒の企画デザイン)

創立150周年記念事業

附属聴覚特別支援学校 副校長

眞田進夫

令和7年5月22日(木)、本校は創立150周年を迎え、記念式典を体育館

にて挙行了しました。本校は、1875年(明治8年)5月22日に、古川正雄、津田仙ら6名が楽善会を組織して盲者の教育を計画し、その後、山尾庸三が加わって、聾者の教育に発展させたところから始まります。

本式典は、我が国の歴史ある、聴覚障害教育のはじまりに尽力された先人に敬意を表し、今後のさらなる発展を祈念して開催しました。式典は、小学部の児童による国歌・校歌の奏楽で始まりました。本校への期待をこめた祝辞等をいただいた後、生徒会長が、「これから私たちが生きていくのは未来です。社会の変化を受け止めながら、本校で学んだ力を生かして、自立した一人の人間として活躍していくことが、何よりも

大切だと感じています」と、決意を述べました。当日は、秋篠宮皇嗣妃殿下をはじめ、文部科学大臣政務官や筑波大学長、国際交流協定校長(パリ、ソウル聾学校)のほか、多くの来賓に御臨席いただき、厳粛さと温かさが調和した思い出深い式典となりました。その他、記念事業として、令和7年10月に全校幼児児童生徒による人文字の写真撮影、11月の文化祭における卒業生記念講演を予定しています。

本校は、今後も聴覚に障害のある幼児児童生徒一人一人の可能性を最大限に引き出す教育活動を行い、インクルーシブでグローバルな社会をリードする人材の育成を目指します。



「記念式典150日前からのカウントダウンカレンダー(一部)(中学部生徒の制作)」



創立150周年記念品(式典しおり、記念誌、瓦煎餅、風呂敷)

喜びの言葉(高等部普通科生徒会会長)



音楽科「演奏研究」授業 での2台ピアノの取り組み

附属視覚特別支援学校 高等部音楽科 教諭 永山香織

授業の様子



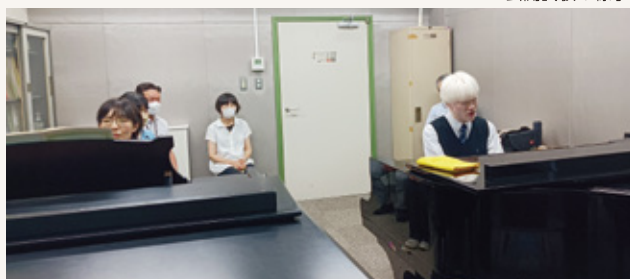
本校の高等部音楽科では、一昨年度からの研究テーマを「音楽授業における対話と共有」と定め、ピアノ専攻生徒

の「演奏研究」の授業では、2台のピアノを2人の奏者が演奏するスタイルの曲に取り組んでいます。視覚障害生徒がアンサンブルをする際、目で見ながらタイミングを合わせることは困難ですが、お互いの息を感じ取りながら練習をします。自分が持っている音楽的なイメージをピアノの音として表現させながら、共演者とイメージを共有して音楽を作っていかなければならず、言葉だけに頼らない音を通じての「対話と共有」を常に行っていることになります。そのため、授業では以下のことを意識しながら曲を仕上げていきました。

- (1) 冒頭部や、音楽的な切れ目でのタイミングを合わせるということ
- (2) 2人の音の質を揃えるということ
- (3) 音楽的な流れや表現を意識すること
- (4) 2人それぞれの表現をすり合わせていくこと
- (5) 響きのバランスに意識を向けるということ
- (6) 曲の構成をふまえたうえで、表現を工夫していくということ

生徒からは「普段のレッスンでは先生から教えてもらう感じだけど、2台ピアノの時にはお互いに意見を言い合ったりして対等になれるというのが新鮮に感じたし、楽しかった。」という感想が聞かれました。なお、前期末には、演奏研究の試験を音楽科以外の教員にも公開で行いました。今後も、2台ピアノのための作品に取り組むことを通じて、細部の演奏表現にまで気を配ることが出来るようになるよう、引き続きサポートしていきたいと思っています。

公開試験の様子



高校2年生 「関西地域研究」報告

附属駒場中・高等学校 教諭 松尾真太郎

令和7年5月20日～24日までの日程で本校高校2年生は「関西地域研究」を実施しました。前年の菅平への校外学習終了後から、約一年をかけて準備してきました。高校最後の校外学習です。主に企業訪問中心の取材班と観光中心の班がありますが、事前の訪問打診から行動計画、報告書のまとめまで班ごとに計画的に取り組みます。今年は「大阪・関西万博2025」開始間もない時期で、いつもとは違う関西の空気に触れることもでき、現地での一つ一つ、見るもの、手に取るものが生徒にとってよい刺激になったことと確信しています。

例として、奈良市役所観光戦略課に伺った班は、(1) 関西観光業の歴史、(2) 観光業が抱える問題、(3) 観光業と文化財の両立、について熱心に取材していました。関東圏では身近に感じる事が難しい「オーバーツーリズムによる落書きや文化財の保存、修繕費用」問題、「文化財的建造物」と「非文化財的建造物」の境界線などについて、奈良と京都を比較しながらそれぞれの視点で丁寧に報告書をまとめています。また別の班は「関西の食の多様性」に着目し、京野菜を栽培する生産者へオンラインで事前取材、現地の京都では料亭に訪問取材と段階を踏みながら、まさに「地域研究」を深めました。

関西地域研究の過程を通じて、生徒個々は確実に成長しています。この成果を学年、学校全体へいかに還元していくか、ここから更なる成長に期待しています。



近鉄吉野線
車両にて



近鉄吉野駅

01

しょくぶつ と いっしょに!

附属大塚特別支援学校 幼稚部主事 森澤亮介

春は新入生歓迎遠足で小石川後樂園に行き青々と茂った木々や葉っぱと触れ合いました。楽しかった遠足の経験から「葉っぱやお花を育ててみよう」ということでマリーゴールドやアネモネを植えました。種を触るところから始めたのですが、みんな「お花が咲くのかな?」と興味津々でした。初めてのものに触ることが苦手な子も、お友だちの様子を見ながら種や土を触って、丁寧に植えることができました。

マリーゴールドは、本校の敷地内にある「えがおカフェ」の前に置かせてもらい、みんなで水やりなどのお世話をして…きれいな花が咲きました。秋にはまた違うお花を育てます。「えがおカフェ」にいらっしゃる時には是非みてくださいね!



たねをつてみよう!



みずやりがんばってます!

桐陰祭実行委員



02

宇宙の果てに何を得たか

附属高校 桐陰祭実行委員長

石崎笈之介

令和7年9月6日・7日に行われた第69回桐陰祭は当日晴天に恵まれ、素晴らしい環境のもとで行われました。前日は台風が通過しており、準備に限界があったにもかかわらず無事開催できたことを嬉しく思います。

今回のテーマは「宇宙遊泳」。宇宙をイメージした出し物に溢れ、特にジェットコースターなどは遊園地のアトラクションに劣らない完成度でした。今回の桐陰祭では食事販売の整理券システムなどの新しいシステムを取り入れ、これまでにない桐陰祭にすることができたと感じています。今年度は約4,000人の方にご来場していただき、楽しんでいただけました。来年度は70回目の桐陰祭になります。70年続いている桐陰祭が、来年度以降も素晴らしいものになっていくよう心から願っています。



グラブプリ・びっぴりだこ



閉会式：バルーン風船

03

施設併設学級スポーツデー

附属桐が丘特別支援学校 教諭 福西八光

令和7年6月25日(水)に施設併設学級でスポーツデーを実施しました。前半はアダプテッドスポーツ体験、後半は紅白に分かれて集団競技を行いました。アダプテッドスポーツ体験では、前後左右に動く台車に乗ってスケートボードのようにバンク(坂)を乗り越えたり、台車と台車を連結させてコーヒーカップのように友達と回転運動をしたりしました。他にも、施設併設学級のオリジナルキャラクターのボックスター星人をボールやフリスビーで倒したり、射的用の銃を使ってパラリンピック種目でもある射撃競技の体験を行ったりしました。後半の集団競技では、パラバルーンを動かして中央のくぼみに風船を落とす競技を行いました。児童生徒達は保護者や卒業生の見守り中、体育の授業で身に付けた動きを発揮し、学部や学級の垣根を越えて色々な友達と運動を楽しんでいる様子でした。



みんなで力を合わせて風船を動かします



友達と回転運動を楽しんでいます



東北の魅力と可能性を探る旅: 修学旅行 in 仙台

附属中学校 教諭 田川愛里

令和7年5月7日～10日にかけて、「東北の魅力と可能性を考える」をテーマに、修学旅行を実施しました。生徒たちは、東日本大震災からの復興の歩みや、自然との共生の歴史と現在に深く向き合い、自然との共生への意識を大きく高めることができました。

1日目の震災学習を土台として、2・3日目は「文学」「地域創生」「自然」の3コースから2つを選択する活動と、「SDGs」コースに分かれて展開されました。

文学コースでは、松尾芭蕉の『奥の細道』に描かれた松島の風景を船上から目にし、語り部さんの体験談に耳を傾けることで、文学と表現の力を探りました。また、東北大学資料館では、文豪魯迅の志に触れる学びを得ました。

自然コースのテーマは「火山と共に生きる」。蔵王ジオパーク推進協議会の協力のもと、山頂巡りや沸点・水質調査などの科学実験を実施。地域の事業者との交流を通じ、人と自然が密接に関わり合うジオパークの意義を深く学びました。



文学コースの松島にある雄島にて

地域創生コースは、石巻市で地域活性化の方法を探索。「ISHINOMAKI2.0」でのワークショップや「石巻ファーム」での農業体験を通じ、六次産業化や持続可能性について議論し、「私たちの幸せとは何か」を考える貴重な機会となりました。

SDGsコースは「豊かな海の資源を守る」に焦点を当て、宮城県漁協組合や宮城県立水産高校で学びました。震災後の漁業の現状、持続可能な漁業と生態系について多角的に迫るとともに、東松島市では復興に携わった方々との交流や、脱炭素社会を目指すまちづくりの取り組みを学習しました。

最終日の4日目には、現地でお世話になった方々への学習発表会を実施。この3泊4日は、生徒たちにとって、震災、歴史・文化、そして現代の社会課題といった多角的な視点から東北の現状、未来の可能性について真剣に考える深い学びの機会となりました。現地で温かいご指導をいただいた全ての方々に、心より感謝申し上げます。



震災遺構門脇小学校見学の様子



保護者をつくる自閉症児と 大学生とのサマーキャンプ

附属久里浜特別支援学校 副校長 工藤久美

令和7年8月23日(土)・24日(日)、筑波大学附属久里浜特別支援学校を会場に「保護者をつくる自閉症児と大学生とのサマーキャンプ」を開催しました。この企画は、同校PTAが学長懇談会で「教育を学ぶ学生に自閉症児の学びを体験してほしい」と提案したことから始まりました。筑波大学の学生12名、学校から12組の家族が参加し、教員ボランティアも含め約60名が集まりました。1日目は「自閉症児と関わる際の配慮」や「家庭生活」についての講義、2日目は野比海岸での磯遊びやヤギとのふれあい、思い出アート

作りなどを通じて交流を深めました。学生の多くは自閉症児と初めて関わりましたが、体験を通して理解が深まったとの声が多く寄せられました。保護者からも「会ったばかりの学生さんと楽しく遊ぶ姿に感動した」との感想がありました。参加者からは、サマーキャンプを継続してほしいという声も多いので、学生、保護者、教員で役割分担をしながら持続可能な企画・実施できたらと考えています。

自閉症との家庭生活について
保護者の話を聞く



海で遊ぶ



ヤギさんとのふれあい体験



集合写真

令和7年度 理療科教員 養成施設 春季スポーツデー

理療科教員養成施設 助教 工藤 滋

江島杉山神社にて



理療科教員養成施設には、全国の視覚特別支援学校に設置されている理療（あん摩マッサージ指圧、はり、きゅう）の職業課程の教員を目指す施設生と、はり、きゅうの臨床技術の修得・向上を目指す理療研修生が在籍しています。

施設生の多くは視覚障害者ですが、弱視者の見え方は千差万別です。また、これまで視覚障害者と交流する機会の少なかった晴眼者もあります。そこで本施設では、新入生が入学して1ヶ月ほど経った時期に、毎年スポーツデーを企画しています。このイベントは、スポーツを通じて在籍生同士、また在籍生と教職員の親睦を深めるとともに、視覚障害への理解を深める良い機会となることを目指しています。令和7年度は5月17日(土)に、東京都墨田区にある江島杉山神社の見学後、東京スカイツリーまでウォーキングし、展望台からの眺望を楽しみました。参加者は、在学生20名と教職員4名でした。



江島杉山神社は、全国に鍼灸講習所を開設して視覚障害者への理療教育を始めた江戸時代の全盲の鍼師、杉山和一が祀られていることから、本施設と深い縁のある場所です。当日はあいにくの雨降りでしたが、傘を差し、時に水たまりをよけながらのウォーキングは、視覚障害者の移動介助の貴重な体験の機会となりました。途中でペアを交代しながら会話を楽しんでいると、いつの間にかスカイツリーに到着していました。展望台からの景色は、初めは雲海ばかりでしたが、ふっと雲が切れてミニチュアの街並みが広がると、わっと歓声が上がりました。

よく歩き、よく話し、よく笑い、目的通り楽しい1日となりました。



スカイツリーで集合写真

プールと海がつなぐ 先輩と仲間との絆

附属小学校 教諭 齋藤直人

「愛洋～！」

令和7年も富浦の海に子どもたちの声が響きました。毎年6年生は千葉県富浦の海で遠泳に挑みます。遠泳は難しい挑戦ですが、



水泳学校での練習の様子

無茶な挑戦ではありません。それは、1年生の時から遠泳を見据えた計画的な体育授業と、夏休みに実施している卒業生が指導する水泳学校での練習の積み重ねが、子どもたちに泳力と自信をつけてくれるからです。

体育授業では、目標を細かく区切りながら、泳ぐのが得意な子も苦手な子もみんなで一緒に泳力を伸ばし合うことを意識しています。PTA「若桐会」の協力で実施している水泳学校では、本校の卒業生がコーチとなり、毎年一人ひとりに細やかで温かな指導をしてくれます。技術的な指導はもちろんですが、かつて水泳学校や遠泳を経験してきた卒業生のコーチだからこその子どもたちの寄り添った言葉がけが非常に心強く、憧れの想いを抱きながら、毎年充実した時間を過ごしています。



手を取り合いながらの初めての海での練習

そして、富浦ではこちらも先輩方の組織である「桐遊倶楽部」の皆さんが指導にあたってくれます。今年はカムチャツカ半島の地震による津波の影響や台風の影響など予定通りには練習ができませんでした。そんな中でも安全を最優先に、臨機応変に対応し、子どもたちの挑戦を支えてくださいました。厳しくも温かな指導のお陰で、子どもたちは仲間と共に安心して富浦の海に全力で挑みました。

「一人では困難でも、みんなと一緒にならば乗り越えることができる」ことを水泳学校と遠泳を通して実感することができました。この経験が、人生の糧になっていくのです。



海に響き渡る「愛洋」の声

写真：長谷川フォトプロ



第11回 共生シンポジウム ～共生社会を目指すつくばふぞくの集い～

令和7年12月13日(土) 13:30～16:30

参加費 無料

会場 筑波大学附属中学校・高等学校 桐陰会館
東京都文京区大塚1-9-1 (対面・オンライン ※要申込)

- 13:30 開会
- 13:33 教育長挨拶
講師紹介
- 13:40 第1部 講演
- 14:40 休憩
- 15:00 第2部 シンポジウム
・生徒実行委員会報告
・各校代表による発表
- 16:00 質疑応答
- 16:20 講師・来賓感想
- 16:30 閉会

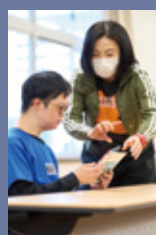
第1部 講演 13:40～

3年後の自分に感謝されたい
～障害のある俳優たちとの挑戦～



【右端が藤井先生。左から2番目が登壇する小敷氏】
＜撮影：丸山晴生＞

こやぶしんや まるやま はるき まつした なつき
小敷伸也・丸山晴生・松下奈津希 (アヴニールプロダクション)



【演技レッスンの様子】
＜撮影：丸山晴生＞

ふじい きよみ
講師 藤井清美氏 (脚本家・演出家)

講師プロフィール

筑波大学第一学群人文学類でヨーロッパ史を学ぶ。
主な作品に映画『るろうに剣心』シリーズ、『鳩の
撃退法』、連続ドラマ・映画『おっさんのパンツが
なんだっていいじゃないか!』、連続ドラマ『准教授・
高槻彰良の推察』、舞台『流星の音色』(脚本)、『ス
イートホーム ビターホーム』(作・演出)など。

申込

<https://forms.gle/MJPRZm4FUbZzFn9U7>



第2部 シンポジウム 15:00～

『交流行事を通して』

10月19日開催の「つくばふぞく交流会」に参加した附属学校児童生徒が
語る、交流での体験と学び

ポスターデザイン 筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科 造形芸術科 山縣未空

後援 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia (後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.64

発行日……令和7(2025)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 呑海沙織

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-limax [日本製紙]

